連載85

内海善雄（ITU元事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

オックスフォードが選んだ今年の言葉 post-truth（真実を無視する時代）

はなはだ旧聞に属するが、各国で選ばれた「今年（二〇一六年）の言葉」が興味深い。

英国の今年の言葉

英国では、Oxford Dictionaries（オックスフォード辞書）が、「post-truth」を選んだ。およその意味は、「真実を無視する時代」というものである。

「post-」は、例えば、post-war（戦後）のように、本来は時間的に後を意味する接頭語であるが、ここでは意味が拡大され、特定の観念が無用、あるいは無関係になった時代を表す接頭語として使われている。英国のEU離脱やアメリカの大統領選挙などの、真実に基づかず、偽の情報や感情で動く政治を、post-truth politics（真実を無視した政治）と呼ぶ文脈の中で、頻繁に使われたことが、選択の理由とされている。

トランプ大統領が出現してから、この言葉ほど、その意味の重大さを持つ言葉はないのではないだろうか。米国の主要メディアが、選挙運動期間中はもちろんのこと、就任後も、その言動のどこに嘘があるのか、連日、嘘を列挙（fact check）して報道している事実ほど異常なことはない。さすがは、オックスフォードという、英語圏では一番権威のある辞書が選んだ言葉の重みは大きい。

なお、オックスフォードに対抗するCambridge Dictionaries（ケンブリッジ辞書は）「paranoid（偏執症患者）」を選んでいる。グーグルのニュース項目でparanoidを検索すると数十万の記事が検出され、さまざま人物の顔を見ることができる。世の中は変質症患者と思われる人たちで満ち溢れているようだ。

米国の今年の言葉

同じ英語圏でも、米国では、American Dialect Society（アメリカ語協会）が、「dumpster fire」を選んだ。日本人には聞き慣れない言葉であるが、本来、dumpsterとはアメリカで使われているごみ収集用のコンテナのことであり、そのコンテナのゴミが燃えている状況が、dumpster fireである。「とんでもない制御不可能な状況の、誰も取り扱いたくないもの」に、比喩的に使う。大統領選挙運動の文脈の中で二〇一六年に多用されたことが、選ばれた理由である。

なお、米国系の辞書であるウェブスターは、「surreal（超現実的）」、また、ウェブ上の辞書であるDictionary.comは、「Xenophobia（外国人嫌い）」を、今年の言葉としている。いずれも、大統領選に絡んだ風潮を象徴している言葉で分かりやすい。

仏・中の今年の言葉

フランスでは'le Jury du "Mot de l'année"（今年の言葉委員会）が、「RÉFUGIÉS」を選んだ。言葉の意味は明確で、「難民」である。欧州の基本問題を最もよく表し、最もよく使用されている言葉として選ばれた。ちなみに二位は、TERRORISME（テロ）であった。

中国では、国家語言資源モニタリング・研究センター、商務印書館、人民網が主催して、「漢語盘点2016」（二〇一六年を代表する漢字）が発表された。「規」が中国の世相を表した漢字に、また、「変」は国際情勢を象徴する漢字、「一帯一路」は国際キーワードとして選ばれた。

メディアなどで一番多く登場した漢字ではあろうが、規則の「規」や「一帯一路」は、多分に政府からの政治的意思の発信が見え隠れし、欧米諸国の「今年の言葉」とは異質のものだろう。しかし、それ自体が世相をよく表していると言えるものである。

一方、台湾では、湾紙・聯合報と徐元智先生紀念基金会が共催して、「苦」を選んだ。「苦」は、激しい自然災害が多かったことや、中台関係の悪化で観光関連産業が打撃を受けたこと、低所得の若者の増加などなどを象徴する文字として選ばれたと、聯合報は伝えている。

日本の「金」を海外の人はどう捉えるのか（写真／時事）

このように見てくると、各国の「今年の言葉」は、外国のことには疎い日本人にも、その国で今、何が一番問題になっており、人々の関心がどこにあるのか、非常に的確に教えてくれるキーワードであることが分かる。

日本の「金」

さて、日本の「今年の漢字」はどうだろう。ご承知の通り、昨年暮れ、日本漢字能力検定協会が、「金」を選んで、清水寺で発表された。

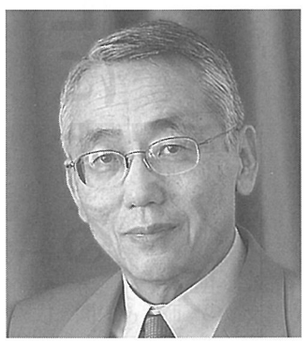
海外の人には、「金」が選ばれた日本をどう思うだろうか。「gold」と訳されれば、リオ・オリンピックで金メダルラッシュになり、日本中が感動したこと、そして東京オリンピックへ意気込む日本社会を反映した漢字と映る。マルコ・ポーロの東方見聞録で記述されたジパングともイメージが通じる。

しかし、「money」と訳されれば、マイナス金利の金融政策でなんとかしようとする経済、セコイ前都知事、伏魔殿の豊洲問題、無責任・放漫運営の東京オリンピック準備など政治と「カネ」にかかる堕落した日本社会、それに金儲け主義だけに走った日本ビジネスマンの古いイメージが思い起こされる。いずれにしても、現在、人類が直面する地球規模的な問題や世界の大きな流れからは隔離された異次元の世界に映るのではないか。

もっとも、協会のホームページによると、トランプ氏の「金」髪も金が選ばれた理由の一端だとしているが、これはあまりにも笑止千万である。

もちろん、日本が、「post-truth」の状況でなく、また、「RÉFUGIÉS」の流入もなく、「dumpster fire」も起きてないことは、真に幸せで、めでたいことである。しかし、世界が、「post-truth」となり、「paranoid」で満ち溢れていれば、グローバル時代の今、「dumpster fire」が飛び火する危険は極めて大きい。これまで海外で起きている現象は、数年以内には必ず日本でも起きてきた。

一番用心しなければならないことは、無意識のうちに「post-truth」が起きることではないだろうか。圧倒的な与党議員数を持った長期政権下、社会全体に真摯な議論がないがしろにされがちで、しかも、ジャーナリストが事実確認を怠る傾向は、「post-truth」の予兆だとも言えなくはないかもしれない。



内海善雄（うつみ よしお）
1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。ＩＥＥＥ名誉会員。

連載85

内海善雄（ITU元事務総局長）のやぶ睨み「ネット社会」論

オックスフォードが選んだ今年の言葉 post-truth（真実を無視する時代）

はなはだ旧聞に属するが、各国で選ばれた「今年（二〇一六年）の言葉」が興味深い。

英国の今年の言葉

英国では、Oxford Dictionaries（オックスフォード辞書）が、「post-truth」を選んだ。およその意味は、「真実を無視する時代」というものである。

「post-」は、例えば、post-war（戦後）のように、本来は時間的に後を意味する接頭語であるが、ここでは意味が拡大され、特定の観念が無用、あるいは無関係になった時代を表す接頭語として使われている。英国のEU離脱やアメリカの大統領選挙などの、真実に基づかず、偽の情報や感情で動く政治を、post-truth politics（真実を無視した政治）と呼ぶ文脈の中で、頻繁に使われたことが、選択の理由とされている。

トランプ大統領が出現してから、この言葉ほど、その意味の重大さを持つ言葉はないのではないだろうか。米国の主要メディアが、選挙運動期間中はもちろんのこと、就任後も、その言動のどこに嘘があるのか、連日、嘘を列挙（fact check）して報道している事実ほど異常なことはない。さすがは、オックスフォードという、英語圏では一番権威のある辞書が選んだ言葉の重みは大きい。

なお、オックスフォードに対抗するCambridge Dictionaries（ケンブリッジ辞書は）「paranoid（偏執症患者）」を選んでいる。グーグルのニュース項目でparanoidを検索すると数十万の記事が検出され、さまざま人物の顔を見ることができる。世の中は変質症患者と思われる人たちで満ち溢れているようだ。

米国の今年の言葉

同じ英語圏でも、米国では、American Dialect Society（アメリカ語協会）が、「dumpster fire」を選んだ。日本人には聞き慣れない言葉であるが、本来、dumpsterとはアメリカで使われているごみ収集用のコンテナのことであり、そのコンテナのゴミが燃えている状況が、dumpster fireである。「とんでもない制御不可能な状況の、誰も取り扱いたくないもの」に、比喩的に使う。大統領選挙運動の文脈の中で二〇一六年に多用されたことが、選ばれた理由である。

なお、米国系の辞書であるウェブスターは、「surreal（超現実的）」、また、ウェブ上の辞書であるDictionary.comは、「Xenophobia（外国人嫌い）」を、今年の言葉としている。いずれも、大統領選に絡んだ風潮を象徴している言葉で分かりやすい。

仏・中の今年の言葉

フランスでは、le Jury du "Mot de l'année"（今年の言葉委員会）が、「RÉFUGIÉS」を選んだ。言葉の意味は明確で、「難民」である。欧州の基本問題を最もよく表し、最もよく使用されている言葉として選ばれた。ちなみに二位は、TERRORISME（テロ）であった。

中国では、国家語言資源モニタリング・研究センター、商務印書館、人民網が主催して、「漢語盘点2016」（二〇一六年を代表する漢字）が発表された。「規」が中国の世相を表した漢字に、また、「変」は国際情勢を象徴する漢字、「一帯一路」は国際キーワードとして選ばれた。

メディアなどで一番多く登場した漢字ではあろうが、規則の「規」や「一帯一路」は、多分に政府からの政治的意思の発信が見え隠れし、欧米諸国の「今年の言葉」とは異質のものだろう。しかし、それ自体が世相をよく表していると言えるものである。

一方、台湾では、湾紙・聯合報と徐元智先生紀念基金会が共催して、「苦」を選んだ。「苦」は、激しい自然災害が多かったことや、中台関係の悪化で観光関連産業が打撃を受けたこと、低所得の若者の増加などなどを象徴する文字として選ばれたと、聯合報は伝えている。

日本の「金」を海外の人はどう捉えるのか（写真／時事）

このように見てくると、各国の「今年の言葉」は、外国のことには疎い日本人にも、その国で今、何が一番問題になっており、人々の関心がどこにあるのか、非常に的確に教えてくれるキーワードであることが分かる。

日本の「金」

さて、日本の「今年の漢字」はどうだろう。ご承知の通り、昨年暮れ、日本漢字能力検定協会が、「金」を選んで、清水寺で発表された。

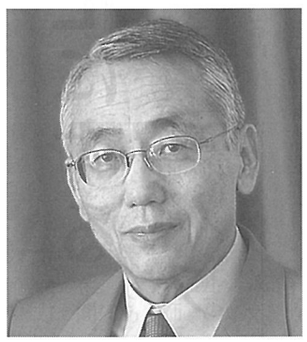
海外の人には、「金」が選ばれた日本をどう思うだろうか。「gold」と訳されれば、リオ・オリンピックで金メダルラッシュになり、日本中が感動したこと、そして東京オリンピックへ意気込む日本社会を反映した漢字と映る。マルコ・ポーロの東方見聞録で記述されたジパングともイメージが通じる。

しかし、「money」と訳されれば、マイナス金利の金融政策でなんとかしようとする経済、セコイ前都知事、伏魔殿の豊洲問題、無責任・放漫運営の東京オリンピック準備など政治と「カネ」にかかる堕落した日本社会、それに金儲け主義だけに走った日本ビジネスマンの古いイメージが思い起こされる。いずれにしても、現在、人類が直面する地球規模的な問題や世界の大きな流れからは隔離された異次元の世界に映るのではないか。

もっとも、協会のホームページによると、トランプ氏の「金」髪も金が選ばれた理由の一端だとしているが、これはあまりにも笑止千万である。

もちろん、日本が、「post-truth」の状況でなく、また、「RÉFUGIÉS」の流入もなく、「dumpster fire」も起きてないことは、真に幸せで、めでたいことである。しかし、世界が、「post-truth」となり、「paranoid」で満ち溢れていれば、グローバル時代の今、「dumpster fire」が飛び火する危険は極めて大きい。これまで海外で起きている現象は、数年以内には必ず日本でも起きてきた。

一番用心しなければならないことは、無意識のうちに「post-truth」が起きることではないだろうか。圧倒的な与党議員数を持った長期政権下、社会全体に真摯な議論がないがしろにされがちで、しかも、ジャーナリストが事実確認を怠る傾向は、「post-truth」の予兆だとも言えなくはないかもしれない。



内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ＩＴＵ）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。ＩＥＥＥ名誉会員。